Narashino International Association

NIA SQUARE スクウェア

第40号

1997年12月1日発行
〈編集〉
習志野市国際交流協会

特　集　在日ポーランド大使公邸を訪ねて
REPORT　'97姉妹都市青少年派遣報告記
REPORT　タスカルーサの思い出・他
AIR MAIL 定期便　北イタリアのクリスマスとお正月
年末特別手記　習志野第九とドイツ語
国際交流最前線　食卓の貯金箱から
会員紹介　こんにちは・コ・ン・ニ・チ・ハ
Let's チャレンジ　ザ・英文クロスワードパズル

創刊40号
特　集

在日ポーランド大使公邸を訪ねて

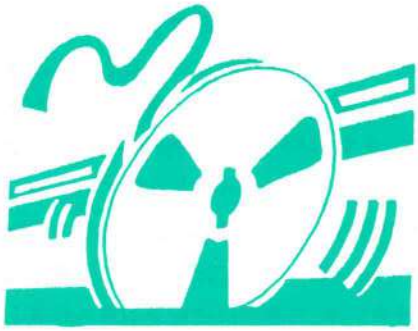
マリア・ポミャノースカさんと伝統音楽

～Strings & Music Instruments の世界～

取材・文
福田　陽子
(N.I.A.会員)

国際交流に関わる人々にとってとても縁の深い場所の一つに大使館があります。大使とは国家や君主を代表する最上級の外交使節。その妻という枠にとらわれず広範な文化活動を展開しているポーランド大使夫人 Maria Pomianowska さんを東京・目黒区の公邸に訪ねました。

○マリアさんの優雅な応待



国の文化を音色で表現

「サランギ」「ガドゥーカ」「スーカ」…この言葉を聞いてすぐに何の名称か答えられる人なら、ここにご紹介するマリア・ポミャノースカさんの名前もご存じかもしれません。チェリストというジャンルを超え、自国ポーランドでは国民的音楽家として有名なミュージシャン。マリアさんは、ヨーロッパやアジア各国の伝統的な弦楽器を操り、世界中でリサイタルやレクチャーを展開するなど精力的な文化活動を続けています。今回は多忙なスケジュールの中、一人でも多くの日本の人々に弦楽器の素晴らしさを伝えたいというご自身の希望もあって N.I.A. の取材が実現。マリアさんのキャリアを背

景に弦楽器の魅力、そして古くから親日的といわれるポーランドという国について楽しく語っていただきました。

●マリアさんはとても親日的

インド音楽に魅せられて…

ポーランドという国からまず思い浮かぶ著名人といえば、フレデリック・ショパン。マリアさんは、ショパンを生んだワルシャワで8歳のころからチェロを学び始めました。その後はチェロの道を究めるべくワルシャワ音楽アカデミーに進学。大勢の若者がそうであるように彼女もまた東洋文化や宗教に興味を持ったと言います。マリアさんの興味は留まるところを知らず、チェリストとしての本能が弦楽器のルーツを求めて古代インド音楽へと向かい、ひいてはインドの古典楽器「サランギ」の世界に彼女を引き入れました。「サランギ」は北インド発祥の弦楽器で、チェリストといえどもマスターするには相当難しい楽器。そこで彼女は単身インドに飛び、有名なサランギ奏者のもとで猛勉強。ワルシャワでの勉学に加えてインド音楽の素養をも深めていきました。

アカデミー卒業後は、チェリスト、サランギストとして多くのリサイタルに出演する一方で、ソリストとしても『ラガ・サンキット』というグループを率いてポーランド各地でコンサートやレクチャーを展開してきました。民主化の波に洗われた80年代半ばに入ると、マリアさんのインド音楽についての教養や伝統楽器に対する情熱ある音楽活動がポーランド国内で話題の的となります。テレビやラジオでその活躍ぶりが報じられる中、88年にはついにファーストアルバムをリリース。その評価は国内のみならず、海外の舞台でも数々の栄誉ある音楽祭に名を連ねたのでした。

そんな中で、マリアさんは新たに「ガドゥーカ」というブルガリア由来の弦楽器に注目。ヨーロッパに数ある弦楽器の中で現在までその形状、演奏スタイルが古代より変わらない数少ない楽器、それが「ガドゥーカ」でした。それは、楽器のルーツというものにこだわる彼女にとって運命的な出会いでした。自分自身へのまた新たな挑戦が始まり、ついにポーランドで幻の楽器といわれる「スーカ」にも挑むこととなったのです。

蘇える音色にのせて…

ポーランドに「スーカ」という弦楽器が存在していた、その事実は音楽の歴史資料などにより知られていたものの「スーカ」自体は19世紀に入るころには人々から忘れ去られていた過去の楽器でした。その「スーカ」がマリアさんや技術者たちの手によって復元、アレンジされ、今から4年前に再び世に出ることになったのです。指の爪を使う古典的な演奏テクニックによるポーランド音楽の美しい音色。「スーカ」はまたもやポーランド国民の心を捕らえました。翌年には世界に先駆け、東京の武蔵野音楽大学で初めての演奏披露を成し遂げ、マリアさんは今や「スーカ」奏者の第一人者として世界を駆け回っています。

近年は新たにモンゴルや中国、韓国の伝統的な弦楽器の習得にも注力。彼女の挑戦はまだまだ続いています。そして、インド古典音楽が中心だったファーストアルバムに続き、セカンドアルバムはポーランドの古典楽器「スーカ」によるショ

○マリアさんとご子息（インタビュー

中国語・広東語・日本語教室生徒募集

●会話　初級、中級、上級　　●3～6週間速修コース
●出張レッスンコース　　●中国・語学研修ツアー
※月謝制　1レッスン1～3人　1コース3～6人
※講師全員がネイティブ
※中国語・日本語レベルを無料で検定しています
お問合せ・お申込み：☎0474-76-5813（10:00～19:00 除日曜）
欧藤日中文化交流学院　理事長・欧陽一山（薬学博士）
習志野市本大久保5-4-9　ユースパイン3F（京成大久保駅3分）

大募集
●習志野市日中友好協会会員
●翻訳・通訳及び留学業務助手
●教師、ガイド、通訳・翻訳者（登録制 時給1300～4000円）

習志野市日中友好協会との特別企画
海南島、広州、深圳友好旅行6～8日間

日中友好25週年記念特別企画として、ハワイより美しい海南島、華南の国際都市広州、活気に満ちている経済特別区深圳観光旅行及び友好交流コースを開催致します。参加者には8つの特典があります。

特典1　出発日自由自在！
特典2　グループだけの専用バス・ガイドをご用意します！
特典3　豪華なホテル（国際標準4ツまたは5ツ星）をご用意します！
特典4　記念集合写真をプレゼント!!
特典5　豪華な中国料理をご用意します!!
特典6　海南日本語グループ会員との友好交流をご用意します！
特典7　中国名産品を買うことができます！
特典8　有名漢方医の受診又は整体治療、漢方薬も注文できます！

お問合せ・お申込み：☎0474-76-5813（10:00～19:00　日曜日を除く）
欧藤国際発展有限会社・代表取締役　欧陽一山（薬学博士）
習志野市本大久保5-4-9 ユースパイン3F（京成大久保駅3分）

パンのマズルカをはじめ同国伝統のフォークミュージックを堪能できる必聴のアルバムとなりました。「忘れ去られた音を今の時代によみがえらせたい」。彼女のこの考えは、今、次々と現実のものになっています。サードアルバムでは、「スーカ」より更にルーツと見られるいにしえの楽器が登場して話題になりました。ワルシャワに程近い街で12年前に見つかり、復元されたその楽器もまたマリアさんの手によって多くの人々の心に触れることとなったのです。

●この音色を習志野でも

取材中、ここにご紹介した古典楽器の数々を実際に演奏してくれたマリアさん。ポーランドから持参してきた貴重な楽器を一つ一つ手に取って、素材や構造を我々にも分かりやすく説明してくれました。その表情は「外交官夫人」ではなく「ミュージシャン」のそれであったことは言うまでもありません。そして何よりも印象的なのがマリアさんの笑顔。楽器を演奏し、また歌う姿に「本当に音楽を愛している人なのだ」と、改めて感心してしまいました。その上、嬉しいことにマリアさんは是非習志野市でも演奏を披露してみたいと言ってくれました。

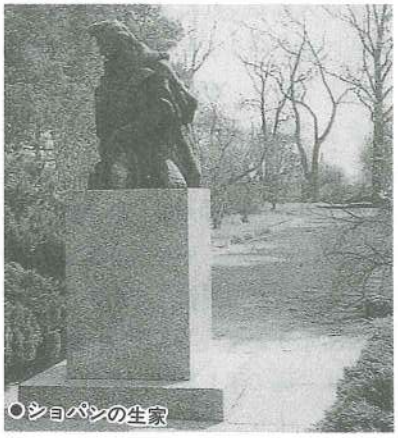
近い将来、N.I.A. でマリアさんのコンサートを企画することができれば、なんと素晴らしいことでしょう。N.I.A.のアットホームな雰囲気でポーランドの芸術を堪能できるチャンス。ご期待下さい。

ポーランド共和国 (Republic of Poland)

■GEOGRAPHY & HISTORY

ヨーロッパで７番目に大きい国ポーランドは、ドイツ連邦共和国、チェコ共和国、スロバキア共和国、ウクライナ、ベラルーシ、ロシア共和国と６つの国に接している。北にはバルト海が開け、夏を除いて気候は寒冷である。ポーランドの歴史は、異民族の侵攻とそれに対する抵抗によって作られたといっても過言ではない。それもこの国がヨーロッパの北と南、東と西を結ぶ交通の要衝にあって各民族の葛藤に巻き込まれやすい地理にあるためである。近年は1989年に東欧初の非共産党政権が成立後、国名も変更して市場経済への移行、経済自由化が定着。来年には欧州連合 (EU) への加盟交渉が開始される。

●オシビエンチムの収容所跡。ドイツ語でアウシュビッツ。



●ショパンの生家

■CULTURE

歴史上の興亡を繰り返し、悲劇の国とさえ呼ばれたポーランドだが、そんな歴史が逆にポーランド人の愛国心をますます深めていった。外の世界から多様な思想、芸術を吸収しながら独自の文化を形成し、ヨーロッパ経済の中心地西ヨーロッパにも少なからず影響を及ぼしたと言われている。世界的著名人にはショパンをはじめ、ルトスワフスキ、ヨハネ・パウロ二世、コペルニクス、キュリー夫人などを輩出。歴史に翻弄された風土が生む不屈の精神と弱い者をいたわる優しい気質とを合わせ持った国民性は、広く知られている。

インターネットはNTTにおまかせ

OCNダイヤルアクセス

●新規ご契約の費用

契約料	800円
工事費	3,000円
合計	3,800円

※工事費は標準料金です。工事内容により異なる場合があります。

●毎月のご利用料金

基本額(月額)	月15時間まで	2,300円
加算額	15時間を超えるご利用時間分	9円／1分

※累計利用時間が0の場合も基本額は必要

※月の途中でご利用を開始された場合でも基本額は必要となります。
※別途アクセスポイントまでの通話料が必要です。

(0474)-72-2000 (午前9時～午後4時 土・日・祝日は休業とさせていただきます) NTT習志野営業所

救急指定 労災指定 医療法人 津田沼中央病院

〒275 千葉県習志野市谷津1丁目9番17号 ☎0474(76)5111(代表)

創立 昭和54年12月15日 病床数 278床

診療科目：内科・外科・整形外科・脳神経外科・小児科・人工透析科 リハビリテーション科・耳鼻咽喉科・皮膚科・泌尿器科 肛門科・形成外科・リウマチ科・神経内科・人間ドック

診療時間：月・水・金 午前9:00～午後1:00 午後2:00～7:00
火・木・土 午前9:00～午後1:00 午後2:00～5:30
休診日：日曜日・祭日（但し、急患は除く）

●併設 津田沼老人訪問看護ステーション ☎0474(73)3565
●関連施設 東習志野訪問看護ステーション ☎0474(77)9995
●透析センター

REPORT／'97 姉妹都市青少年派遣報告記

I miss "Tuscaloosa"

井吉 仙征(いよし のりゆき) (N.I.A.理事)

高校生のとき派遣生として姉妹都市を訪問してから6年…時が経つのは早いものである。今度は、私が派遣生たちを引率して再びタスカルーサの地を踏んだ。なんて素晴らしいことなんだろう！久しぶりに見る街並みは、幾つかの新しいレストランができていたり、多少変わっていたところもあった。しかし、以前と変わらない人々のぬくもり、温かさを肌で感じることができた。"Southen Hospitality" である。私は、なんと幸いにも6年前のホストファミリーの家に泊まることになった。

～ John and Peggy's family ～

息子 (John. Jr.) が、タスカルーサからの派遣生として習志野を訪問した次の年に私を受け入れてくれた家族。John. Jr. は仕事の都合で再会できなかったが、アラバマ大学生の妹と会うことができた。Peggyの祖父(故人)はタスカルーサで要職に就いていたことがあり、市内には彼の名が付いた "Snow Hinton Park" がある。

夕食で、Peggyの手料理に舌つづみを打った。味付けした煮豆とオクラの揚げ物である。日本では嫌いなオクラも、不思議とおいしく食べられた。それからブレーブスの試合を見た。今日のゲームも勝ってPeggyはご機嫌である。一方、Johnは釣り具の手入れに忙しい。とうとう手伝うことになった。リールを巻くのである。そのご褒美に釣りのやり方を教えてくれたが、やったことのない私には難しかった。何度竿を投げても糸が絡まってしまう。特訓は一時間続き、ようやく形は整った。それにしても我が家の庭で竿を投げられるとは、やはりアメリカはビッグである。「今度来るときは釣りをしよう」と、Johnは言った。…それまでに練習しておこう… 日本での趣味がまた一つ増えた。

～ Bob and Dorothy's family ～

Bobはアラバマ大学の薬学ドクターで、京大や舞鶴の病院で指導した経歴を持つ。娘もアラバマ大学法学部に在学中。息子は士官学校を卒業して米空軍に在籍。日本について詳しいこの家族は、特に相撲好きで小錦関の大ファンである。

この家では文部省からアラバマ大に派遣された英語の先生三人と一緒になった。まずは、家族全員で日本料理店「弁慶」に案内された。6年前も連れて行ってくれた店だ。シェフがパフォーマンスしながら料理を作るところで、(日本に帰ってから友人に聞いてみると、ハワイにも同じような店があるそうだ) 楽しい雰囲気を出している。次の日、Partyでお礼を兼ねて皆でご飯を炊いておにぎりやそば、うどんを作った。おかげで、集まった友人たちにも大好評だった。最後に庭で、私が居合道を披露した。緊張してうまく演武できなかったが、皆の拍手に救われた。

～ 刀の持ち込み ～

居合で披露した刀は、真剣ではなく模造刀（本物に近い重さではあるが、刃がないもの）だが、日本から持って行くのに苦労した。まず最初、成田空港に入る前に車のトランクを開けて持ち物チェックをされた。そして、刀を見るや税関の人だけでなく警察官もやってきて、本籍は聞かれるし、パスポート番号も控えられ、厳重な検査が続いた。その時は、たまたま居合の経験がある警察官がいて、姉妹都市交流の話をしたら逆に励まされるという面白い出来事になった。

成田からアトランタまで飛行機の貨物室で運ばれたためか、着いたとき一緒に入れていた手入れ用の油が干上がっていた。これは刀にも悪いと判断し、帰りは機内に持ち込もうと考えた。しかし、ボディーチェックの機械のところで見事に引っかかり、アメリカの空港職員に呼び出され、結局行きと同じ場所に戻されてしまった。成田に着くまで不安で一杯だったが、何とか刀も無事に帰国した。

最終日の答礼会での演武は、たくさんの拍手をいただきホッとしている。日本文化を伝えた充実感に酔いしれた。これからも習志野市とタスカルーサ市の国際交流活動に精一杯取り組んで、両市の架け橋になりたいと思う。

●ジェミソンホーム(by Yuichi)

●ホストファミリー(by Yumi)

●子ども博物館(by Shoko)

●ベンツ・ビジターセンター(by Risa)

●答礼会(by Ayako)

●補修が待たれる「日本の家」

MY DIARY IN AMERICA

加藤友美(船橋東高校２年)・桜井祥子(跡見学園高校２年)

７月27日(日)

アトランタ空港で日本人の集団が走っていた。(もちろん私たちのこと) 予定便の搭乗口が変わっていたのだ。離陸15分前、巨大な空港の長い廊下を突然今来た方向へと引き返す集団はかなり目立っていたらしく、通路両端にいた人達の視線を集めてしまった。無事バーミンガム空港に着き、車でタスカルーサへ向かう途中大きな看板がいくつも目に入った。さすがAmerica! どれもユニークで木よりも高く、誰にも邪魔されることなく自己主張してた。約１時間でタスカルーサ、ジェミソンホームに到着。ここは、これから毎日私たちの集合場所になるところ。ホストマザーが迎えてくれた。ファザーは、家で大きなテレビを見ていた。「テレビは彼のおもちゃよ」とマザーが言った。修学旅行で京都の太秦に行ったときの写真を見せたら「ここがあなたの住んでる町？」と聞かれてしまった。ついでにフミヤの写真も見せたらすごく気に入ったらしく、カラーで拡大コピーして額に入れてプレゼントしてくれた。夜、郵便局に連れて行ってもらった。無人で自動販売機が置いてあるだけだった。32¢切手を買う。お釣りも切手だった。アメリカの郵便ポストは青色だと知っていたが、三つも並んでいたので初めて見た時は分別ゴミのボックスかと思った。家に戻ったら、デリスがいろいろな歌を聴かせてくれた。「気に入った歌を後で録音してあげるね」と約束してくれた。 **(友美)**

今日からホームステイ開始、私たちはライスさんの家に滞在する。パパとママに18歳のデリスと14歳のダナイ、四人家族に私たちを加えてもらった。 **(祥子)**

７月28日(月)

皆との集合時間は８時。いつ家を出るのか７時50分頃になって聞いた。「あと２、３分」と言われた。が、それから甘ーい紅茶を高さ20cm程の大きなコップに注いでくれ、結局家を出たのが８時。「朝食は何がいい？」と聞かれ、「クッキー」と答えたら途中でクッキーサンドを買ってくれた。片手に紅茶、もう片方にクッキーサンドを持ってジェミソンホームに着いたのは８時20分を過ぎた頃。マザーは「遅刻ね？」と微笑みながら帰っていった。夕方、家に戻ってから従姉妹たちとショッピングに行った。帰りの車の中は、歌でまさにカーニバルだった。**(友美)**

夕方から子どもたちの従姉妹３人が合流して賑やかな遊びが始まった。彼女たちはとても愉快で色々なことに興味を持ち、私たちが見せた折り紙にも大いに関心を示してくれた。**(祥子)**

７月29日(火)

夕方から再びショッピングに連れて行ってもらう。ずっとそこにいたかったのだが、「明日の朝は早いからもう帰って寝よう」というママの言葉で車に乗り込んだ。ところが、着いた場所が昨日と違う。なんとそこは従姉妹たちの家だった。叔母さんが玄関で私たちを待っていてくれたのだ。結局、今夜も遅くまで賑やかに遊んだ。 **(祥子)**

家族は皆親切で、私が英語を分からずにいると簡単に言い換えてくれたり、辞書を引いたりして分かるまで何回も言い直してくれた。アメリカは本当に大きい。土地も物も心も大きい。そんなふうに思えた。 **(友美)**

７月30日(水)

NASA宇宙センターへ… 朝６時半出発、夜９時帰宅。帰る途中、ボランティアの田端さんが中華料理店に案内してくれた。すごくおいしかった！改めて自分がアジアの人間だと実感した。家に帰るとデリスが約束どおり歌を録音しておいてくれた。「明日から旅行なので、会えるのは今夜が最後」だそうだ。寂しい…… **(友美)**

７月31日(木)

アラバマ大学は、キャンパスがすごーく広くてどこからどこまでが大学なのか分からなかった。リスがいると聞いていたが、一匹も出会わず残念。夕方、従姉妹たちと一緒にビデオを借りに行った。従姉妹の一人が12歳であることを知った。とても12歳とは思えない。他の従姉妹たちも実際より４、５歳は上に見える。ダナイも14歳には見えない。夜、明日の支度をしていたらマザーが「これで手紙を書いてね」と言って便せんをくれた。"From the desk of Yumi Kato"とプリントされている。感激… **(友美)**

今日は、ホストファミリーと過ごす最後の夜。ママはコンピュータに「私たちと一緒に過ごすことができてよかった」と、文字を打ってくれた。今夜も来てくれた従姉妹たちは、「答礼会には必ず行く」と約束して帰っていった。 **(祥子)**

８月１日(金)

ビーチへ小旅行。メキシコ湾まで片道約５時間。ホテルに着いてすぐ、目の前の海岸へ走った。浜辺に張ってあるネットでビーチバレーをした。久しぶりに熱中したせいか手が真っ赤になってしまった。こんなことは初めてだ。夜、無理を言って花火を買いに行ってもらった。しかし、砂浜で花火をやっていたのは、私たちだけだった。すかさず苦情がきた。ここでは一般の人はあまり花火などで騒がないらしく、自然の中で静かに過ごすことを知った。 **(友美)**

８月２日(土)

クルージングをした。風がすごく気持ち良かった。野性のイルカを間近に見たのは初めてだった。午後、海岸でスイカ割りをした。アメリカのスイカは日本のスイカを横に２個つなげたくらいの大きさがあるので「当たり」が良かった！ **(友美)**

８月３日(日)

朝、昼ともにマクドナルドだった。これはかなりキツい。アメリカに来て一番つらかったのは食事だ。ホームステイ中、朝は毎日クッキーサンド、夜はピザなどで飲み物は主にコーラ、紅茶（Unsweet Teaと言わないと砂糖水のような紅茶が出る）、水（NASAでは一杯５¢）だった。子ども博物館で日本の家を見ていたらファミリーに「あなたの家もこんなふう？」と聞かれ、「違う」と言ったらなぜか安心していたようだ。これは確かに日本の家に見えるけど、四畳半一間で障子が破れた家に家族が住むと思われては、かなりの誤解だと思う。 **(友美)**

答礼会でファミリーと再会。私たちに手紙を持ってきてくれた。"Shoko, hate to see you leave"と書かれていて、家族全員と従姉妹たちのサインがしてあった。嬉しい… いよいよ別れのとき、私と同世代で気の合ったダナイと従姉妹たちは、「好きです！」と日本語で叫んで見送ってくれた。「今まで日本人に良いイメージを持っていなかったけど、あなた達は良い人」と言ってくれたデリス。「友達なんだから、またいつでも遊びにおいで」と言ってくれたパパとママ。この愉快で優しい一家を私は決して忘れない。 **(祥子)**

タスカルーサの思い出　湯地美和子(県立船橋高校２年)

私は、車の窓からタスカルーサの広々とした風景を眺めていた。湖、畑、赤レンガの小じんまりとした家々が見える。運転しているホストファミリーのトレントさんが私たちに様々な質問をするけれど、少し興奮気味でぼんやりしていた私はほとんどの問いに「Yes…」と答えていたように思う。タスカルーサは、私が想像していたとおりのところだった。静かで、自然があふれていて、「アメリカ南部の田舎の風景」がそこにあった。驚いたこともあった。それは「暑さ」。南部の赤土から沸き立つ乾いた熱気は、長旅で意識が遠のきそうな私をしばしばハッとさせてくれた。

車が家に入るとガレージのシャッターが自動で閉まり、私たちは家の中に案内された。室内に一歩足を踏み入れた途端、思わず「涼しいー！」と叫んでいた。どの部屋もすっかり冷やされ、天井には大きなファンが回っていた。ここでは外出する時もエアコンを止めないということにまた驚いた。

家で過ごした時間は、実際それほど長くなかった。夜、食事をして寝るまでの間ぐらいだ。それだけに、思い出をたくさん作ろうと思った。一緒にトランプをしたり、ビデオを見たり…いつも９時か10時にはベッドに入ると言っていたトレントさんに夜更かしをさせてしまったけれど、私は楽しい思い出をたくさんつくることができた。今振り返ると、トレントさんが自分の思い出話をしてくれた時のことが一番心に残っている。私も自分のことをもっとトレントさんに話せば良かった、と少し後悔している。帰国してすぐ、トレントさんに手紙を書いた。書きながら、タスカルーサのことを一つ一つ思い出していた。

最高の派遣団　木嶋美雪(大妻高校２年)

高校生活で大きなことに挑戦できるのは今年が最後！憧れのアメリカに着いたとき、見るものすべてが珍しくて興奮しながら写真を撮っていました。ホストファミリーは、私たちが英語をうまく話せないと知っていながら、もの凄いスピードで話しかけてきたので、きっと私たちを特別扱いせずに家族の一員として普通に迎えてくださったのだと感じました。家族のこんな接し方が私にはとても嬉しく、すぐ一緒に過ごす自信がついて溶け込むことができました。家族の友達も紹介してくれて、一緒にゲームをしたり、時にはルールのことで喧嘩だってしました。出発前のオリエンテーションで先輩派遣生からアドバイスされた「正しい文法を使って話そうと思うのではなく、笑顔と表現力と仲よくなろうとする心さえあれば大丈夫」という言葉の意味をこのとき実感しました。

タスカルーサの女の子たちと意気投合し、「あなたが好きよ」と言われたときはうまく話せなくても心が通じ合えるのだと分かりました。そして、アメリカについてもっと知りたい、もっと話せるようになりたいと、ますます意欲がわいてきました。大学へ入ったら、留学してたくさんのことを学びたいと思っています。

平凡な夏休みを送っていたら決して出会うことのなかったタスカルーサの人々、私のもう一つの家族、たくさんの友達、たくさんの思い出、そして別れ。今年の夏、習志野市とタスカルーサ市を結ぶ代表として過ごせたことを誇りに思えて幸せです。これからも互いに連絡を取り合い、N.I.A.会員として姉妹都市交流をお手伝いしていきたいと思います。来年は、私たちが習志野市を紹介する番です。タスカルーサのお友達が来るのを今からとても楽しみに待っています。

15歳が見たアメリカ　鳩貝真理(東邦高校１年)

この夏、習志野市青少年派遣団員として行ったアメリカ。そこで私は、たくさんの人たちと出会い、生の英語に触れながら素晴らしい異文化体験をすることができました。ホストファミリーは、両親と男の子１人、女の子２人という明るく優しい雰囲気の家庭で、私たちをとても温かく迎え入れてくれました。そこへドイツから来た２人の女の子が加わり、総勢９人の国際的大家族が出来上りました。私たちは、国籍も肌の色も母国語も異なりましたが、お互いのことを尊重し合い、一つ屋根の下で仲良く暮らすことができました。私はこの貴重な体験から、「世界は一つ」という言葉を肌で感じ取ったような気がします。

ちょっぴりの英語といっぱいの笑顔。そして、たっぷりのボディランゲージという自分なりのコミュニケーション法で頑張ったのは、一つ一つの出会いを大切にしたかったからです。その甲斐あってか帰国後の今、十数人の新しい友達と海を越えた文通を楽しんでいます。それは些細なことかもしれません。でも、私にとってはキラキラ光る宝石のような思い出を相手に伝え、分かち合うことができる幸せを心からありがたく思うのです。

今は、この派遣事業に関わってくださった全ての人々に対する感謝の気持ちでいっぱいです。これから先、私にもきっと国際感覚が必要になる場面がたくさんあることでしょう。日本を違った視点から見たり、素敵な人たちと素敵な時を過ごしたり、姉妹都市間の小さな架け橋になったり…　そうした機会がある限り、私は今回の派遣経験を生かし、自分なりの国際交流を続けていきたいと思っています。

ホームステイの報告　佐藤綾子(第三中学３年)

行く前の予想では「あぁ、いい勉強になったなぁ」になるはずだったが、そうはならなかった。というのも、会話の勉強をして行かなかったからだ。学校の授業でALTの先生が話す英語は、ある程度聞き取れた。だから、アメリカに行っても分かると思っていたのだ。ALTの先生は生徒に分かりやすいよう、ゆっくりと簡単な単語を使って話しかけていたからなのに、そうとは気付かず甘かった。甘過ぎた。私は、涙する程つらいホームステイを過ごしてしまった。ファミリーの話す英語が全く聞き取れなくて２回程ゆっくり話してくれるよう頼むと、私より話の通じるもう一人の派遣生へと話を移すのだ。大ショックだった。やっぱり勉強してから行くべきだった、と後悔したものの、せっかくのアメリカ旅行を後悔だけで終わらすのもなんだか惜しい。

それならば残りの日々を思う存分に楽しむしかない、と思い直した。そして、ステイ中にやって来た自分の誕生日で見事に立ち直った。タスカルーサにいる間、付きっきりでお世話していただいたバイロンさんが、私のために内緒の誕生パーティーを用意してくれたのだ。人生15回目の誕生日は、初めて感動できた。きっと、この先何十回と誕生日を迎えても一番は15回目しかないだろう。ケーキもプレゼントも。初めて会う人たちまでもが、私のためにバースデーソングを歌ってくれた。拍手で私を祝ってくれた。この時私は、アメリカという国と人々に初めて感動した。「あぁ、すごい国だ」。もし、私の誕生日が派遣中でなかったら、大切なこの感動に気付かず、ステイを遊びだけで終わらせていたかもしれない。英語以外に学んだ事が数えきれないほどあった今回の派遣は、すごく大きな出来事だった。「あぁ、楽しかったなぁ」。これが、ホームステイ終了直後の私の感想である。

エマッドとアドゥハム　増田雄一（成城高校２年）

僕たちのホストファミリーにはエマッドとアドゥハムという兄弟がいて、初めて会った日、エマッドは森へ案内してくれました。森の中を歩きながら２時間ほど話をしたのだけれど、聞き取るのが精一杯で自分からはあまり話すことができませんでした。その時は、これから始まるホストファミリーとの生活がうまくいくか、とても不安に思いました。２日目の夜、彼とテレビゲームをやることになり、時の経つのも忘れて夜中の３時頃まで延々と続けてしまいました。ゲームを始めてみると、彼の言葉が多少分からなくても言いたいことは分かるようになってきました。今考えると、彼と仲良く会話ができるようになったのは、「ゲームのおかげだなぁ」と思います。

アドゥハムは僕たちがタスカルーサにいる間ずっと一緒に行動してくれたので話す機会がとても多く、いつの間にか彼が外国人だということを忘れていました。うっかり日本語で話しかけてしまったこともあるけれど、彼も僕たちの言いたいことが分かるようで、お互いに気持ちを伝えることができました。「親しくなれば言葉が違っても会話できるのだなぁ」と、僕は思いました。

エマッドはメキシコ湾のビーチへも一緒に来てくれたので、小旅行がより楽しいものになりました。でも楽しかった分、彼らと別れる時はとてもつらく、11日間という時の短さを知らされました。タスカルーサで過ごした日々…それは、とても充実していて一日たりとも飽きることのない夏休み最高の思い出になりました。

ホストファミリーから学ぶ　小畑聡一朗（東邦中学３年）

一番印象に残っているのは、アメリカの家族と過ごした時間だ。僕らのホストファミリーには４歳のアドゥハムと13歳のエマッドという二人の男の子がいた。彼らと共に過ごした時間が一番印象に残っている。庭で上半身裸になってバレーボールをしたり、森の中を歩いたり、夜中の３時までゲームに熱中したこともあった。最初は心の中で彼らを外国人として捕らえていたが、いろんなことをしているうちにそうは考えなくなっていた。違いがあるのは話す言葉ぐらいで、そんな壁は少しの知識と話そうという気力があれば超えられる。それが、今回学んだことだ。

ファミリーと過ごす楽しい日々もやがては終わりを迎える。８月３日は辛い別れをしなければならない、と思っていた。でも、実際に別れるとき僕たちの家族はとてもあっさりしていた。エマッドと握手して、一言二言交わして別れた。さすがにその時は寂しく思ったが、よく考えるとそう思うのは間違いだと分かった。なぜなら、また会おうと思えばいつでも会える。この別れは、永遠の別れではないからだ。最後に無邪気なアドゥハムが僕たちに言った。「早く一緒に家に帰ろう」。その言葉が忘れられない。だから、いつかまたアドゥハムやエマッドと一緒に「家」に帰る日がくることを僕は待ち望んでいる。

●メキシコ湾をクルーズ：Photo by Soichiro

Seventeen の夏　島田智子（日大習志野高校２年）

自分自身をもっと向上させたい。今の自分を少しでも良く変えたい。そんな思いを胸にタスカルーサへ旅立った。姉妹都市委員会ディレクターのバイロンさん、ホストファミリーのクレップス夫妻をはじめ多くの方々との出会いと別れ、またそこでの生活は私に何を教えてくれたのだろうか。

マウンドビル遺跡で学んだアメリカ先住民の歴史。厳粛な市議会議場。日本では考えられないほど広大なアラバマ大学キャンパス。楽しいアトラクションと科学技術の進歩を教えてくれたNASA 宇宙センター。ロープウェイで登ったストーン・マウンテンの素晴らしい景色。メキシコ湾リゾートの広く美しい海。そして迎えた最後の答礼会。ホストファミリーやタスカルーサで出会った人々と別れの瞬間、私は涙が次から次へと出て止まらなかった。

私が今回の体験から何を得られたのか、今は未だはっきりと分からない。でも、きっと答礼会の時に流した涙の中に答えがあるのかも知れない。単に別れの寂しさだけではなかったのではないか、というのがこの Seventeen の夏に分かったこと…それは、とても素晴らしく貴重な体験でした。

忘れられない11日間　日向りさ（千葉英和高校２年）

タスカルーサに着くまで不安に思っていた事は、「自分の役割をきちんと果たせるか」ということ。市議会議場で、私は習志野市代表としてスピーチした。間違えずに落ち着いてできたのでホッとした。もう心配は要らない。アメリカの人達は言葉があまりできなくても全く気にせず接してくれ、買い物で困っている時もすぐ周りの人が寄ってきて助けてくれた。

ホストファミリーの家はバルコニーにブランコがあって、広さは私の家の５倍はある。ママは、とてもキレイでモデルのよう。子供はいなかったが、パパは私たちのために大きなクマのぬいぐるみをプレゼントしてくれた。うれしくて、それからはずっとそのクマを抱いていた。パパは猟銃を見せてくれた。「日本では普通の人は銃を持つことができないから、本物なんて一生見られないの」と言ったら、「それは、とても良い事だよ」と言っていた。一緒に写真を撮って、少しだけ触らせてもらった。「タスカルーサは平和だから猟銃以外に銃は必要ないよ」と言うけれど、私にとっては銃に大して違いはない。だから、猟銃に触れた一瞬はとてもドキドキした。

ベンツの工場は今年完成したばかりで、パパもまだ行ったことがないという。映画「ジュラシックパーク・ロストワールド」で実際に使われた改造車をはじめ、展示されている車はクラシックカーから未来車まで見ていてとても楽しい。NASA　宇宙センターは、少し遠くて疲れたけれど本物の宇宙船を見たらそんなことは忘れてしまった。私の百倍（いやそれ以上!?）もあるロケットの大きさに圧倒される。乗り物を楽しむこともでき、まるで遊園地のよう。一緒に来た他のファミリーの子供たちとも仲良くなり、とても良い時間を過ごした。そんな姉妹都市青少年派遣の思い出を私は一生忘れることができない。

AIR MAIL 定期便/北イタリアのクリスマスとお正月/

宇井由美子（北イタリア在住 元本誌編集委員）

北イタリアのカルドーニョ市でフレスコ画に取り組む宇井さん。今回は、イタリア式クリスマスと新年の過ごし方がギッシリ。

クリスマスの飾り付け

クリスマスというと、クリスマスツリーとサンタさんからのプレゼントを私たち日本人は連想します。ところが、国民の98%以上がカトリックといわれるイタリアでは、全く違ったクリスマスが営まれます。

12月になると、キリスト誕生の場面を箱庭で表現した「プレゼーピオ」が、家の中や庭に飾られます。毎年、新しく動物や植物、小道具などが加えられて、家族で楽しむのです。幼い子供たちも、手作りのプレゼーピオを通じて、自然とキリストの物語を身につけていきます。(日本で目にするモミの木の鉢植えは、商店などが門松の代わりに赤いリボンを結び、1月末まで飾りつけておきます。)

●プレゼーピオ

町の中の山岳兵

12月8日のマリアの誕生日が過ぎると、各家庭でクリスマス用の菓子作りが始まります。親類や友人たちとの魚料理の食事会が盛んに催され、わが隣組でも、魚のスープ、塩焼き、イカ寿司、トマト煮が並びます。

それに、日が暮れると、毎日のように別の訪問者があります。チョコレートをねだる子供たちの聖歌隊と、それに続く山岳兵の聖歌隊です。山岳兵と聞いて、皆さんは驚かれるかもしれませんが、イタリアには徴兵制度があり、優秀な青年はレンジャー部隊に選抜されて山岳地帯に配属され、山岳兵と呼ばれます。彼等は、退役してからも集団で墓の掃除や老人の世話、難民救助などのボランティア活動をすることで有名です。クリスマスには、旧ソ連の原発事故のあったチェルノブイリの子供たちが50人づつやってきて、山岳兵の支援で休暇を過ごします。イタリアでは、教会に次ぐ奉仕団体として人々の信頼感は抜群です。羽根のついた濃緑色の帽子は、子供たちの憧れです。

静かな聖夜

クリスマスは、粗末な食事と赤ワインで済ませ、真夜中に、教会のミサに参列します。町の灯はろうそくに代わり、聖夜はヒッソリと更けて行きます。聞くところによれば、近所の男性の多くは、この夜のミサ以外には教会に行かないそうです。初詣だけの参拝という、どこかの国と似ていますね。

聖夜の翌日は、隣近所や親類とあいさつ回りをするので、両方のホッペが赤くなるほどのキスの連続です。

大みそかの大騒ぎ

12月31日から元日にかけて、8時間～10時間以上にわたってご馳走を食べます。北イタリア独特の豚肉料理である舌入りザンポーネやコテッキーノ、それに幸運を招くといわれるレンズ豆などです。食べてはダンス、飲んでは食べて踊りまくります。真夜中の12時を告げると、3粒のぶどうを食べ、新年のあいさつのキスを交わします。花火が鳴り、どの家々もドンチャン騒ぎが続きます。南部の地域ほど皿や家具の壊れかけたものを窓から投げるので、外を歩くことは禁物。去年も死者3名。ケガ960名の犠牲者を出しました。こうした大騒ぎは、今を精一杯楽しもう、というイタリア的発想から生まれた習慣のようです。

魔女の贈りもの

1月6日はEPIFANIA「エピファニア）の日で、心やさしい魔女（Befana・ベファーナ）がホウキに乗って、子供たちの靴下の中にプレゼントをしてくれます。ただし、行ないの悪い子には墨の贈りもの。12月に入ると、近所のワンパク坊主たちが、父親の雪かきを手伝ったりしはじめるのも、魔女のせいです。

皆さんに、ベファーナから素敵な贈りものが届きますように！

Buon Natale e Felice Anno Nuovo!

(良い年をお迎えください。)

Befana

開業5周年記念―クレストウェディングプラン

適用期間＝平成9年4月1日から平成10年3月31日まで

クローバー 40名様 660,000円より
（サービス料込・税金別）
（平成9年7月1日～8月31日・12月1日～平成10年2月28日及びその他の月の平日と土・日・祝祭日の仏滅）
その他各種プランも御用意しています。

上記プランのくわしい内容については下記にお問い合わせください。
ご予約・お問い合わせは
TEL (0474)53-1201〈直通〉

物語が集う〈コミュニティホテル〉です。
ザ・クレストホテル津田沼では、この習志野の街で育まれるさまざまな物語を、豊かにふくらませる〈コミュニティホテル〉をめざしています。
● 85の客室 ● 3つのレストラン・ラウンジ
● 10の大小宴会場

ザ・クレストホテル
津田沼
（帝国ホテルグループ）
〒275 千葉県習志野市津田沼5-12-4
TEL 0474(53)1111〈代表〉
京成・新京成津田沼駅前

手作りを続けて17年たちます。
小1生～高3生まで
ACTセミナー（アクト）
小学生 6名 中・高校生 8名以内/1クラス
大学へ7割以上の現役合格者を出しています。
何でも聞ける雰囲気と答えられる力がアクトなのです。
習志野市東習志野4-8-21 ☎0474-77-6315

年末特別手記／習志野第九とドイツ語

……友野 信善（N.I.A. 会員）

第20回記念習志野第九演奏会に寄せて

1978年暮に習志野文化ホールの竣工を祝い、市民参加の習志野フィルハーモニー管弦楽団と習志野第九合唱団、これを率いる指揮者・伴有雄、更にこのイベントを後援する習志野市教育委員会ほか多くの皆様に支えられて、第一回習志野第九演奏会が実施されました。一回の演奏会では聴衆を収容しきれず予定外の二夜目の演奏会を挙行し、これも満席という大成功を収めた初演でした。そして関係各位の熱意が結集し、以降毎年引き継がれ今年はとうとう第20回目を迎えるに至りました。

我々日本人にとって第九を歌うことは、否が応でもドイツ語との取り組みにつながります。第４楽章を担当する第九のメンバーは例年9月に合唱団を結成し、毎週日曜日の午後に15～16回程の練習を積み重ね、その年の技術レベルを頂点にもって行った上でステージに立ちます。毎年指導の先生方を悩ませ、また私たち合唱団員が苦労するのはドイツ語です。ステージでは暗譜で歌うことがずっと実行されてきました。39行、200語に及ぶシラーの「歓喜に寄す」の歌詞は奥行が深く、何回歌っても新鮮です。せっかく歌うならドイツ人が聞いても分かるドイツ語を、ということが私たちの願いでした。

20年間で習志野第九のステージに立った人々は延べ5,400名、実数では約2,000名もの方々が参加し、それぞれの体験と思いをもって演奏に臨み、そして散会、また翌年再会を繰り返してきました。第九、ドイツ語、ドイツ文化、ドイツとの交流へと展開も広がりを見せています。こうした中で名実ともにドイツとの親交を適えたのは、この演奏会が第15回以来続けてドイツ連邦共和国大使館の後援をいただいていることです。後援承認には厳しい審査があると聞いております。沢山ある申請の中から、大使館の名において後援するにふさわしいかどうかの判断が大使館文化部において下されます、習志野第九の場合、千葉県のローカルコミュニティーで15回もやってきたという実績、習志野市誕生40年のお祝いなど戦後50年を地域とともに歩んだ里程のアピール、またドイツとの縁は第一次大戦後ドイツ軍捕虜が習志野に抑留された1914年にさかのぼる等々、ポイントとタイミングが奏功したのでしょう。

しかし、本当に後援が可能となったもう一つの大きな要因があるのです。申請に当たり作成した原案を肉付けし、血の通った文章に練り上げ、大使館文化部をして納得できるものにしてくれたのが、N.I.A.ドイツ語講座を長年にわたりご担当されている斉藤テレジア先生なのです。ご夫妻で私の文章を添削してくださり、最終原稿は息をのむ程に見事なドイツ語になっていました。

●解団式での筆者

今年も第20回演奏会に当たり再びドイツ大使館文化部に後援申請を致しました。そして、８月末に正式の後援承諾書とともにプログラム掲載用の挨拶文が送られてきました。そこには、「ベートーベンの第九交響曲は不朽の名曲であり、〝歓喜に寄す〟は全世界の邂逅のための橋をかけるものである」……と記されています。

第20回習志野第九演奏会は、12月23日の祝日に習志野文化ホールにて行なわれます。お一人でも多くの皆様のお越しを心からお待ち申しあげます。

（とものの・のぶよし/元習志野第九合唱団長）

●昨年の習志野第九演奏会

あらゆる旅を
トータルにプロデュース
For Your Travelife
JTB

JTB船橋支店
個人・グループ国内旅行 0474-23-3011
個人・グループ海外旅行 0474-23-6655
国内・海外団体旅行 0474-23-3171

JTB津田沼支店
個人・グループ国内旅行 0474-76-9264
個人・グループ海外旅行 0474-79-5685

（午前10時から午後6時まで営業いたします。）

船橋支店　日曜・祝日休業
船橋市本町3-1-1
津田沼支店　火曜休業
習志野市津田沼1-2-1

日本交通公社

口座振替で手間をかけずにお積み立て。
積立定期ひまわり
津田沼支店
電話 0474-52-2111
ちばぎん

国際交流最前線/食卓の貯金箱から　世界の子どもと手をつなぐ会・高安久美子（たかやすくみこ）

Gast Aan Tafel
オランダ語で　ハストゥ・アーン・ターフェルといいます。

『世界の子どもと手をつなぐ会(Japanese Organization for Infants and Children)』通称JOFICは国際協力活動をしている小さなNGOです。16年前に一人の主婦が始めたこの活動も、現在は会員が全国に500人。他のNGOと比べると決して大きな規模ではありませんが、この16年間に支援してきた世界の子どもたちの数は数えきれません。

さて、JOFICの活動は会員の食卓に置かれた小さな貯金箱から始まります。第三世界といわれる国から一人のお客様を招いたつもりで、その食事代を貯金箱に入れていただくのです。そして貯金箱にたまったお金を事務局に送っていただき、JOFICではそれを第三世界の、主に子どもたちのための教育・医療に役立てます。現在はネパール、タイ、バングラデシュ、インド、フィリピン、ボリビア、ペルーの7か国、8か所のプロジェクトを支援していますが、たとえばタイではスラム街の図書館運営に、ボリビアではストリートチルドレンの給食活動や小児病院の設備に、ネパールでは山奥の村のヘルスポストや小学校の建設にと、支援の形は様々です。支援先からはそれぞれ活動報告や会計報告を送ってもらうと共に、スタッフが現地を訪問して支援金の使われ方やプロジェクトの有効性、進捗状況などを実際に把握します。

もう一つ、JOFICが大切にしている活動に「開発教育」があります。開発教育とは、第三世界の状況を理解すると共に自分たちの生活を見つめ直し、地球市民としての意識を育てようとするものです。JOFICでは年4回『JOFIC通信』を発行し、現地の様子やプロジェクトの状況などを会員に知らせていますが、会員の方々の気持ちを貯金箱から世界の子どもたちに届け、その子どもたちの様子を今度は通信に載せて再び会員のもとへ届ける。そして、それを話題としてまた次のお客様を招いていただく。こうした積み重ねによってそれぞれの国が身近な存在となり、少しずつ開発教育として実を結ぶことができたら、と思っています。その他、学校や公民館での講演会・学習会の開催、東南アジアの女性たちが自立のために作った手工芸品の販売など、多くの方にこれらの国々のことを理解していただけるよう活動しています。

JOFICを運営するスタッフは習志野市に住む主婦を中心に現在10名。全員無給ですが、実際には目には見えない大きな報酬を受け取っているように思います。この仕事をすることで、自立とは、援助とは、共生とは、といった問題を学ぶと同時に、何より第三世界の様子をリアルに知ることができ、それは日本の社会や自分の生活を問い直す事にもつながってきます。第三世界の子どもたちの現実は確かに心の痛む悲惨なものですが、一方ではその子どもたちからたくましさや優しさを教わることも多いのです。

JOFICでは、いつでも、どんな形でも、あなたの参加をお待ちしています。

〔連絡先　TEL & FAX
(0474)51-9337　坂田代表まで〕

●辺見エミリさんの取材を受けて

●ネパール山間部、ミッテル村で

●南インド、NGO支援の学校

IEC 国際交流センター
英会話スクール
当スクールは、英語教師を米国、カナダから招請しています。
先生方を貴方の御家庭や友人に紹介し、日常生活からの国際化にお役立て下さい。
京成津田沼駅クレストホテル前
☎51－0104

御歳暮、ふる里セール　12月25日まで
〈特別企画〉●1件 ¥5,000以上　全国・宅配便運賃　無料サービス
●1件 ¥2,000以上 4,900円まで　全国・宅配便運賃　350円でサービス
★お客様のお荷物も宅配便にて、落花生と共に同送致します！
御仏事の御返礼品は専門店の信用あるお茶を
(価格は御予算に応じて調整致します)
大久保銀座通り本店 ☎0474(72)1569
大久保駅前マルエツ店内店 ☎0474(78)5057
実籾ギフト・プラザ店 ☎0474(73)2903
一味違う老舗の味　大久保園

会員紹介／こんにちは、コ・ン・ニ・チ・ハ／みなさん、どうぞよろしく！

元気さにびっくり

原田（はらだ）　栄次（えいじ）さん（袖ヶ浦在住）

「これからはアジアの時代」と、語る原田さんがN.I.A.に入会したのは3年前、79歳の時です。原田さんは、1933（昭和8）年にインドネシアで知人が経営する雑貨店に勤務するためスマトラ島に渡り、バタビア市（現在のジャカルタ市）に居を移して現地で戦前まで8年間を過ごされました。

その時、インドネシアの人々から受けた印象は、皆人なつこく素朴で、宗教や習慣の違いはあるけれど日本人に好感を持ってくれた人が多く、とても住み易い国であったそうです。

今、「インドネシアの人に会いたい」とおっしゃる原田さんは、N.I.A.の活動を通して、もっともっと東南アジア諸国の人たちと交流を深めたいと考えています。そして、4年前から中国残留孤児の方の身元引受人をなさるなど、自ら積極的な態度で臨んでおられます。

「日本人は、アジアの国々により強い関心を持ってほしい。また、資源が豊富なところなので、今後の成長が楽しみ」と、語ってくれました。

日本とアジアの橋渡し役として、原田さんの一層のご活躍を期待しています。

(Atsuko・S)

●中国帰国者を訪ねて（右端が原田さん）

使い捨て文化にびっくり

イサベル　国頭（くにがみ）さん（東習志野在住）

日系二世のイサベルさんは、ペルーの首都・リマの出身。91年に来日し、現在は市内の工場で働いています。

「日本はペルーと比べて、格段に治安が良いので安心して町を歩けます。それに日本がこれほど発展したのは、人々に他人を尊敬する気持ちが強いからだと思います。けれど、まだ使えるものをどんどん捨てるのにはびっくりしました。日本人はお金をいっぱい持っていますが、そのお金で何を一番したいのでしょう……。日本の親は子供への愛情が薄いようにも見えます。ペルーでは、親はよく子供にキスをするし、親子の会話も多いですよ」と、なかなか鋭く日本社会を捕えています。

来日前にリマで日本語を学び、現在もN.I.A.の日本語講座で勉強を続けていますが、職場は同郷の日系人が多く、あまり日本語を使う必要がないとのこと。「6年も日本にいるのに日本語がよく分からず恥ずかしい」とのこと。日本人でスペイン語が堪能な人はそう多くないので、友人も日系人ばかりになってしまうそうです。N.I.A.の仲間を通して日本人の友人がたくさんできるといいですね。

(Masayo・H)

●市役所で

若さにびっくり

市川（いちかわ）　珠央（たまお）さん（谷津在住）

中学2年生の市川さんは、N.I.A.最年少（最下学年）会員の一人です。中1の時、友人に紹介されてN.I.A.に入会しました。今回は、中3の僕が彼女の記事を担当します。

市川さんの通う学校は都内の私立校で、高校になると交換留学の制度もあり国際交流に関しては結構積極的だそうです。市川さん自身も、小学校の頃から海外に住む友だちと文通したり、家族で海外旅行に行ったことがあります。中でも小学校2年の時、フランスで2歳上の現地の子と身振り手振りで会話しながら、一緒に遊んだことをよく覚えているそうです。

今も続けている文通の他に、この頃では様々な方面に興味が広がっているとのこと。「世界中の国々に行ってみたいですね。できる限りいろいろな事に参加して外国の人々と出会い、その人たちの心、海外の文化などに触れてみたいです。機会があればホームステイもしてみたいですね」と、はにかみながらもはっきりと答えてくれました。

N.I.A.の活動には今後も積極的に参加していくという市川さん。様々な活動の中で、そんな彼女に会えることを楽しみにしています。

(Soichiro・O)

●市役所で

98年度の奨学生、一般参加生を募集します。
至急 下記まで、資料をご請求下さい。

奨学生募集

高校留学

EF Foundation 日本事務局 東京本部　NA係
〒150 東京都渋谷区恵比寿南1-6-10 恵比寿MFビル14号館6F
TEL03-5722-3003FAX03-5722-3001

企画・デザインからカラー印刷まで

■チラシ
■ポスター
■会社案内
■カタログ
■パンフレット
■伝票類
■包装紙
■その他印刷全般

当社では 企画 設備 技術 あらゆるニーズにお応えします!!

株式会社 コスモ印刷　習志野市茜浜1-2-12　0474-53-3255(代)

Let's チャレンジ/ザ・英文クロスワードパズルNo.40/プレゼント付！

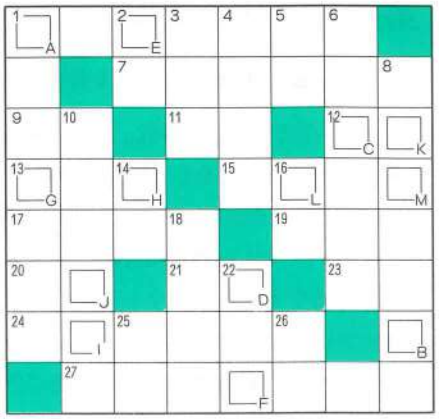
〈DOWN〉

1. London is the ____ city of England
2. United States (of America)
3. National Education Association (init.)
4. ____, taller, tallest
5. Enlisted man or men (init.)
6. Send back to prison until more evidence is obtained
8. _____ Castle is the Queen's primary residence which located west of London
10. Mixture of lime, sand and water used in bulding
14. Central America (init.)
16. Old English (init.)
18. One side of a leaf of paper in a book periodical
22. Plural of man
25. Prifix denoting again
26. Radio telegraphy (init.)

〈ACROSS〉

1. Table on which goods are shown, customers are served, in a shop or bank
7. Seagull
9. Afternoon (opposite of A.M.)
11. American League (init.)
12. Mile(s) (abbrev.)
13. International Olympic Committee (init.)
15. Something lent, especially a sum of money
17. Snare or device for catching animals etc.
19. Finish
20. "A drawing man will clutch ____ a straw" (proverb)
21. Before noon (opposite of P.M.)
23. Doctor of science (init.)
24. Large, _____, largest
27. Enter again

〈出題者〉御園生　馨（N.I.A.会員）



〈応　募　事　項〉

◆クロスを解いたあと、A～Mの文字をつなげて、できたことばが解答です。

♥ハガキに解答と住所、氏名、年齢、職業、電話番号、また本誌の感想等を書いて送って下さい。1月末日必着。

♠正解者の中から抽選で2名の方に、アラバマ大学オリジナル・カードホルダーまたはサバイバルナイフとペンのセットを差し上げます。当選者は、3月上旬発行予定の本誌第41号で発表。

♣宛先：〒275 習志野市鷺沼1-1-1 習志野市役所総務課内「NIA スクウェア」編集部。たくさんのご応募をお待ちしています。

前回の解答と当選者の発表　おめでとうございます！

〈解答〉NATIONALISM

A	M	E	R	I	C	A	N
B	■	C	O	R	E	■	I
S	P	■	D	O	■	I	C
T	O	P	■	N	A	T	O
R	E	S	T	■	A	C	T
A	M	■	I	F	■	H	I
C	■	A	D	A	M	■	N
T	E	L	E	T	Y	P	E

CD-ROM「Tuscaloosa County」

〈当選者〉馬場　雅子さん（会社員）
新村　光輝さん（学生）
長谷川裕子さん（学生）
応募総数は、12通でした。

VOICES/読者の皆様から寄せられた感想です…

●青年海外協力隊の記事、良かったです。ロマンを感じますね。日本の常識などまるで通用しない世界があることを思い出しました。(FM)

タスカルーサ市から＝出展作品募集中＝

PART 1：青少年絵画コンテスト "Young Artist Program"

主催：国際姉妹都市協会

趣旨：同協会の世界的な啓蒙運動に参加するものです。

規定：13～18歳(申請時）の青少年絵画作品1点を習志野市代表作品として送付します。

審査：テキサス州タイラー市で審査を行います。最終入賞者10人には各々300ドルが授与され、所有権が譲渡されます。

課題：地球市民の融合

締切：1998年2月末日

PART 2：姉妹都市国際写真コンテスト

主催：タスカルーサ市姉妹都市委員会

趣旨：タスカルーサ及び姉妹都市習志野とドイツ・ショルンドルフの市民が出展して競う友好イベントです。

規定：概ね28×35cmまたは20×25cmのプリントと原版を一緒に提出。カラー・白黒いずれでも可

審査：バマ・シアターに展示のうえ審査を行います。入賞作品は75ドルで主催者が買い取り、所有権が譲渡されます。

締切：1998年4月末日

上記の受付は、習志野市国際交流協会へ！ TEL 53-9300

編集アラカルト

●サッカーワールドカップ・フランス大会、願いが通じて日本の初出場決定。感激!!
(M・小林)

●年内に、今世紀中に、生きてる間に、と思うも思わぬも同じ年の瀬。　(M・小森)

●「あたたかに冬の陽の寒き哉」 冬の陽に勝る皆様のこの一年の暖かい支援にただ感謝。1998年、新しい交流が芽生えることを願って……合掌　(Y・金庭)

●今年もいろいろありました。習志野の若者30余名がタスカルーサで過ごした夏の情景は、さながら米南部に現れたリトル習志野の如し。　(A・東)

●だんだんと冬めいてきて、夜空も澄んで星がきれいな季節です。ちょっと寒いけれど天体観測するのも良いかも。おすすめです。
(A・菅澤)

NIA スクウェア・第40号
発行・1997年12月1日／発行責任者・林　安次
編集責任者・小林　実／企画構成・小森　雅夫
編集・習志野市国際交流協会
〒275習志野市鷺沼1-1-1習志野市役所総務課内
電話（0474）53-9300